

SRID NEWSLETTER

No. 347 OCTOBER 2004 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www1.odn.ne.jp/~cdv20180>

10月号

国際公益の共有化と公共経営の国際標準化 早稲田大学国際教養学部 大門 毅
イラクの復興

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 東京支社 高津俊司

お知らせ

1. 幹事会 10月20日(水) JBICにて

国際公益の共有化と公共経営の国際標準化

早稲田大学国際教養学部 大門 毅

1990年代後半以降、加速化したグローバル化のうねりは従来の国家・市場・個人の「公益」に対するかかわり方、ありかたに根本的な変化をもたらした。つまり、地方分権・市場主義の台頭により、中央主権制度の役割が相対的に低下する一方、環境問題、テロ対策等、国境を越えた公益に取り組むうえで、市民・非政府組織の果たす役割と責任が拡大している。特に、2001年の同時多発テロ事件以降、国際社会の安定と秩序を模索する中で、いわゆる「国際公益」に対する関心が高まりを見せており、グローバル化の波に取り残された低所得国に対する経済開発援助は国際システムの不安定化の軽減に寄与するという認識から積極的に見直される動きを見せている。こうした思惑は従来、開発援助に消極的であった米共和党政権の国際開発政策を大転回させ、2002年以降、政府開発援助を従来の5割以上増強させる計画を発表している。また日本でも2003年に「貧困削減」「持続的成長」「地球的規模の問題への取り組み」「平和の構築」を重点分野とする「政府開発援助大綱」が発表されたことは記憶に新しい。

「ミレニアム開発目標」(MDG)を例に考えよう。現在MDGの達成は開発援助政策上の当面の優先課題となっており、ある種「国際公益の共有化」ともいえる状況とな

っている。MDG は曖昧な努力目標ではなく、「貧困削減率」や「教育普及率」などの具体的な数値目標の達成を求めており、これは公共政策論で近年さかんに議論されている「成果中心のマネジメント」(RBM)の思想および手法において符合している。そうしてみると、MDG が開発目標として国家間で共有されていることは、結果として開発分野において成果重視の政策評価・マネジメントの国際標準化に寄与しているのではないだろうか。この仮説の詳細な検討は別稿にゆずるが、考え方の大枠は以下の通りである。まず、貧困削減を中心とする MDG の策定に熱心な「リーダー」となる先進国ドナーが国際機関に働きかけ、MDG の策定・モニタリングを「委託」する。付託を受けた国際機関は国際公益を実現するために自律的な活動を行う。委託を受けた国際機関は MDG を達成するため、国別の短中期的目標を策定し、開発途上国に MDG に忠実な国家開発計画 (PRSP) の策定への圧力をかける。さて、多くの開発途上国で PRSP が開発戦略の中心となってくると、従来 MDG・PRSP に消極的であった後発の「フォロアー」先進国が引き続き援助供与を行うためには、MDG の導入を行わざるを得なくなる。ここで MDG が先進国間で共有化される。他方、MDG の共有化はドナー機関の開発戦略が「成果主義」に転換することを暗に要求しているため、従来「新公共経営論」(NPM)の洗礼を受けてこなかった非アングロ・サクソン諸国においても NPM 手法を導入せざるを得なくなる。また、NPM を発展させてきた「リーダー」諸国においても MDG を共有化することにより、国際開発分野における NPM が戦略目標・指標において「標準化」が進むことを意味する。

主要ドナーの開発援助機関を現地調査した結果によれば、MDG を共有し、開発援助政策として重視している諸国においては、総じて RBM が普及しており、MDG が普及していない諸国では RBM の普及は進んでいないことを示唆している。但し、RBM が MDG の共有状況とは無関係に発展してきた国もあり、両者の因果関係の有無及び方向性には曖昧な点が残りに、国ごとの特殊な要因が関与しているため、この点の検証は今後の研究課題となろう。さて、強い官僚制度に基づいて政策を立案・運営してきた日本の場合、RBM が自発的に発展する風土はない。日本の場合は、本来政策評価と対をなすべき戦略計画が策定されないまま、従来の政策を戦略計画と無理にみなしつつ、評価のみ独自に行われてきた経緯がある。この主張は開発援助分野においても然りであり、「新 ODA 大綱」「ODA 中期目標」いずれをとっても、評価可能な戦略目標・指標は盛り込まれていない。MDG についての言及はなく、業績予算とのリンケージも欠如している。つまり、従来の大綱や中期目標と同様に「努力目標」に終わってしまう可能性がある。日本の公共経営が業績予算の導入を含め、新たな段階に脱皮するためには国際システムの変容に機敏に対応していくことが求められる。そのためには行政組織による「内なる改革」に期待することはできないので、市民社会が MDG をはじめとする成果重視の国際貢献のあり方に理解を深め、政策立案者をつき動かしていくことが必要になると思われる。

イラクの復興

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 東京支社 高津俊司

イラクについてのマスコミ報道が連日のように続いている。2004年6月に暫定政権に移譲された後も、戦闘行為やテロなど治安は回復せず混乱状態である。これらの記事や映像を見るたびに、私の胸は痛くなる。

と言うのも、私は1982年から3年間イラクの首都バグダットに家族とともに暮らし、イラク人の多くの知人や友人がいるからだ。当時私は国鉄に在籍していたが、人事交流で在イラク日本国大使館勤務となり、経済班で電気産業訓練センター協力、専門家の日本招聘などの技術協力を担当した。仕事面や個人的なつきあいで多くのイラクの友人ができた。また、休日にはメソポタミア古代文明の遺跡を訪れたり、アラビアンナイトをしのばせる細い路地のスーク（市場）で買い物をしたり、異文化の中で新鮮な毎日であった。

在任中に、イラン・イラク戦争が激化し、バグダットにもミサイルが飛んできたり、南部国境のバスラに戦闘部隊が近づき緊張した場面もあった。その頃には、すでにサダム・フセイン政権であり、秘密警察などで独裁体制を築いていたが、イラン革命の中東への波及を恐れたアメリカは、フセイン政権を支援していた。

その後、イランとの戦争は1988年に終わったが、1991年の湾岸戦争と今回の戦争と続き、イラクの人々は20年以上も戦禍に苦しんでいることとなる。皮肉なことに、国境も気にしなくてもよいような平和な遊牧民が、地下に眠る膨大な石油資源が発見されたことにより、このような悲惨な状況が長く続くことになってしまった。イラクの人々は、アラブやクルドなどの民族、シーア派やスンニ派などの宗教・宗派など多くの異なる民が共存している。イスラエル建国以前は、キリスト教徒やユダヤ教徒も一緒に生活していたという。

このような多様なイラク人は、非常に誇り高い自尊心のある民族であり、家族や一族を愛する気持ちが強い。英国による植民地の経験から欧米人に対する不信感は強く、その反動もありアジアの科学技術立国としての日本には憧れにも近い尊敬の感情を当時は一般的に持っていた。車や家電などの日本製品が市場にあふれていた。また、当時は豊富なオイルマネーを財源として高速道路、病院、学校、高層住宅、石油プラントなどの社会インフラや産業施設の建設に日本企業が数多く参画していた。イランとの戦時下でも途中で投げ出さず、多くの民間人が最後まで仕事をやり遂げてイラク側から高く評価された。

つい最近、日本ではイラク復興支援について、自衛隊の派遣も含めて大きな議論となった。外務省の資料によれば、日本政府は昨年10月のマドリードでのイラク復興支援会議で、無償資金15億ドル、円借款35億ドルの計50億ドルの拠出を表明し、さらに2005年度にイラクへの無償資金協力を約4億ドル（約440億円）追加拠出する

方針を固めた。本年 10 月には東京でイラク復興支援会議が開催されるという。日本は ODA などの資金面ばかりでなく、人材教育支援、国際機関を経由したものや、草の根協力など多くの分野で様々な協力を行う予定である。

アラブの諺に、「困った時の友達が真の友達」とある。オイルショックの時には、当時の中曽根通産大臣が中東諸国を歴訪した折りに、イラクが原油の緊急輸出をして助けてくれた経緯がある。日本はイラク人にとって欧米とは異なる歴史的な背景や立場にあり、過去の多くの民間レベルでの人脈や信頼関係が残っており、それらを活かした日本らしい独自の復興支援が可能ではないか。治安の回復後は、電力、上下水道、治水、道路、通信などの社会インフラを整備し、人々の生活の基盤を固める必要がある。日本の戦後の復興経験などを生かして、SRIDでもイラク復興支援に対する提言などができないだろうか。

「チグリス河の水を飲んだものは、またチグリスに戻ってくる」とイラクの友に言われた。私も機会があれば、再びバグダットを訪れ、何らかのお手伝いできればと思っている。

ご挨拶

有原 元博

SRID 会員の皆様におかれましては、日々ご活躍のことと存じます。ご健康を心から願います。

さて、私この度 7 年間奉職いたしましたハーバード大学を退官し、ハーバード大学名誉教授となりまして、9 月 13 日無事に成田へ帰り着きました。在職中はハーバード大学アーノルド植物園の園長も兼任していた関係で、超多忙で睡眠時間も 4 時間とれば良いほどで健康を害しました。毎晩午前 2 過ぎにホテルに戻りビーフステーキとじゃがいもばかり食べていたので、胆石が 3 つほどでき、10 月に日本で摘出手術を受けることになりました。在職中の一番の思い出はロックフェラー財団から 5 年間で 100 万ドルの支援を受け、学生とともにネパール、ブータン、マレーシア、東シベリア、ブラジルと夏休みを海外実習に過ごし、楽しい思い出となったことです。

逆に一番困ったのはたばこです。私は 1 時間に 2 本吸わないと集中力が切れてしまうので授業中にコーヒブレイクの時間をとり、キャンパスに灰皿を持ち出して学生たちと談笑しながら乗りきりました。

一番残念だったことは授業中に質問させなかったことです。時間にいつも追われていて、質・量ともに満足できる授業にならなかったことが今も後悔しています。

今後 1 年間の予定としては胆石手術が終わったら、1 ヶ月ほど上高地帝国ホテルで休養し、健康を取り戻すこと、それと趣味の俳句と国際関係史研究に没頭することを考えております。おくれればせながら政治をめざします。SRID 会員の皆様、今後とも宜しくご指導の程お願い申し上げます。

カトマンズ 汗でたどれば 小鳥鳴く

胡楊

